

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：23102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02605

研究課題名(和文)日本語創作を通してみた東アジア3国文学の関連様相

研究課題名(英文) Conflict and Connection in the Literature of Three East Asian Countries viewed through the Literary Works Written in Japanese

研究代表者

波田野 節子 (HATANO, Setsuko)

新潟県立大学・その他・名誉教授

研究者番号：50259214

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果として以下の知見を得た。
日本の植民地となった韓国と台湾の作家は日本語を通して西洋近代文学に出会った。韓国と台湾で最初の近代作家とされる李光洙と謝春木の処女作がともに日本語で書かれていることがそれを象徴する。だがハングルという文字があった韓国より、日常語を書写する文字のなかった台湾において日本語はより深く浸透した。植民地末期には皇民化政策により多くの日本語小説が書かれ、植民支配の終焉後、韓国の若い作家は身体に刻印された日本語のトラウマに長く悩まされた。一方、台湾の作家の多くは解放後も日本語で書こうとし、国民政府の苛酷な北京語強制のため創作から離れることをよぎなくされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後75年がたち、韓国ではハングルによる創作が定着し、台湾では国民党政府の言語政策の結果、大陸と同じ中国語で創作するのが普通になった。いまでは日本が行なった日本語強制の痕跡などないかのようなのである。しかし日本語が両国の萌芽期の近代文学にどのような影響を与え、植民地末期の皇民化政策で行った徹底的な日本語教育が、その世代の作家にどのような影響を与えたか、また現在どのような形で痕跡が残されているかの研究はきちんとなされるべきである。本研究は、そうした作業の一環としての意義がある。

研究成果の概要(英文)：The following findings were obtained as research results:

Writers in colonial Korea and Taiwan encountered modern western literature through the Japanese language. The fact that both Yi Gwang-su and Xiechunmu, who are regarded as the first modern writers in Korea and Taiwan, wrote their initial works in Japanese symbolizes this. But, unlike Korea, which had Hangeul, Taiwan's lack of a character system for everyday language led to a deeper penetration of Japanese there. In the late colonial period, many novels were written in Japanese because of the imperialization policy. However, for many young Korean writers, the collapse of colonial rule and freedom to write in their native language were accompanied by a lingering trauma left by years of compulsory Japanese. On the other hand, many Taiwanese writers who wished to continue writing in Japanese after liberation were forced to leave their creations due to the strict enforcement of Mandarin Chinese by the nationalist government.

研究分野：朝鮮近代文学

キーワード：植民地 東アジア 日本語創作 朝鮮近代文学 台湾新文学 李光洙 謝春木 洪命憲

1. 研究開始当初の背景

本研究の淵源は「韓国近代文学の父」といわれる李光洙の研究である。

李光洙が文学に目覚めたのが日本留学中であり、同時代の他の作家もみな留学経験者であることに着目した筆者は、日韓の文学研究者に呼びかけて2006年から3年間、共同研究「植民地期朝鮮文学者の日本体験に関する総合的研究」(基盤研究(B)18320060)を行なった。

明治時代に留学した日本で初めての小説を日本語で書いた李光洙は、昭和の植民統治末期に多くの日本語著作を残した。筆者は「日本語創作」を多角的な視点で検討することが必要だと考え、日米韓の韓国文学研究者のほか、近代史と日本文学を含む研究者に呼びかけて、2012年から3年間、共同研究「朝鮮近代文学における日本語創作に関する総合的研究」(基盤研究(B)25284072)を行なった。

この共同研究によりわかったのは、宗主国の言語が植民地の文学に与えた影響を明らかにするには、時間的にも空間的にもさらに大きな視座が必要であるということだった。

植民地の文学への日本語の干渉は、萌芽期から植民統治が終焉したあとまで、長い時間にわたって続いた。朝鮮戦争後に現れた韓国の「戦後世代」作家は皇民化教育で身体に刻まれた日本語と闘いながら新たな文学言語を生みださねばならなかった。韓国における近代文学研究は長いあいだ1940年代を暗黒期とみなして植民地時代と「断絶」してきたが、最近はこうした「連続性」を直視するようになった。だが、ここまで半世紀を要した自体、植民統治の傷痕(トラウマ)の深さを物語る。

次に必要なのは、空間的な視座の拡大。具体的には日本のもう1つの植民地である台湾を視野に入れることである。植民統治が終焉したあとの台湾では、国民党政府のもとで大陸文学が本流とされて北京語が強制され、日本語作家たちは創作そのものを放棄することを余儀なくされた。だが1990年代に民主化が達成されると「台湾ナショナリズム」の高まりのなかで「台湾文学」の研究が始まり、日本語文学が量産された1940年代を台湾文学の「復興期」とする研究すら現れた。

日本の植民統治が生みだした日本語創作は、旧植民地国のその後の歴史と密接に関わりながら、いまだに深い痕跡をとどめている。こうしたことが、本研究を開始する当初の筆者の問題意識であった。

2. 研究の目的

この問題意識にもとづき、宗主国の言語が2つの植民地の文学に与えた影響を明らかにすることで、これら3国の近代文学の特性を際立たせることができると考えた筆者は、本研究の目的を以下のように設定した。

「日本の植民統治期に韓国と台湾に現れた日本語創作について、その発生から終焉および解放後までを視野に入れて比較検討し、日本を入れた東アジア3国の文学の関連様相を明らかにすることを目的とする」

このような研究には国際的な協力が欠かせない。東アジアの研究者が自国の文学研究を深めるためには国際的な視野が不可欠だと考え、以下の一項を加えた。

「日台中韓の研究者ネットワーク構築を副次的な目的とする」

3. 研究の方法

- (1) 台湾で最初の近代小説「彼女は何處へ」(1922)を日本語で書いた謝春木と、韓国の近代小説の嚆矢『無情』の作者で、処女作は日本語小説「愛か」であった李光洙を比較し、彼らを取り巻いていた言語状況の違いを明らかにする。
- (2) 資料の発掘と整理を行なう。とくに李光洙の植民統治末期著作のうちの多くを占める日本語資料を発掘し、原文をつけた資料集を作成する。
- (3) 「日台中韓の研究者ネットワーク構築」という副次的目的を達成するために積極的に海外の国際学会に出席し、日本で国際シンポジウムを開催する。

4. 研究成果

- (1) 台湾の謝春木の日本語創作を研究して論文「謝春木の日本語創作」(『植民地文化研究』16)を書き、次に謝春木と李光洙の比較研究を行なって論文「東アジアの近代文学と日本語小説」(『日本植民地研究の論点』岩波書店)を書いた。前者は台湾の雑誌『文学台湾』に翻訳が掲載された。

この研究により2作家の言語環境の違いを浮き彫りにすることで、民族主義の傾向が強い韓国近代文学と多様性を重視する台湾新文学という両者の特徴を導きだした。韓国にはハングルという書写文字があったので、李光洙は日本語で「愛か」を書いたあとすぐに韓国語に切替えて創作を始めることができた。ところが書写文字をもたないミンナン語を母語とした謝春木は、日本語と離れることがそのまま文学活動の停止につながった。

この特徴は植民地支配が終わったあとの歩みにも関わっている。韓国ではトラウマを抱えながらも自国語による創作がすぐに復活したが、台湾の作家には日本語以外の創作は難しく、結局、国民党政府の苛酷な中国語強制のなかで多くの作家が創作を離れることを余儀なくされた。

- (2) 資料の発掘については以下の3つの成果を得た。

李光洙が「愛か」を書いたあと、友人の洪命憲が日本の雑誌『文芸世界』に投稿した日本語小説「かきおき」を発掘して韓国で紹介した。洪命憲はのちに被差別階級者を主人公とする大河小説『林巨正』を書いた社会主義者で、解放後は北朝鮮の副首相になった。そのような人物が日韓併合直後に日本語小説を書いていた事実が明らかになったことは、日本語小説をそのまま「親日」(対日協力)行為と見なしてきた韓国の風潮に一石を投じることになった。

韓国の西江大学の研究者と協力して『李光洙後期文章集』全3巻を刊行した。第1巻には小説、第2巻には評論、第3巻には詩・随筆・座談等を収録し、原文が日本語のものは原文と韓国語訳の両方を載せた。台湾の全集はこの方式が一般的だが、韓国では日本語作品は収録されないのがふつうであり、その意味で画期的な資料集となった。李光洙が解放後はずから作った自筆詩集『ネノレ(私の歌)』が東京外国語大学に所蔵されていることを発見し、全頁を撮影して写真資料集を刊行した。

- (3) 「日台中韓の研究者ネットワーク構築」という副次的な目的を達成するため、研究期間内に中国・韓国・台湾・アメリカで開かれた国際学会に14回出席し、日本で国際シンポジウムを2回開催した。日本でのシンポジウムは、研究協力者である東京都立大学の久保明男教授と協力して、東京と沖縄で開催した。参加者の求心点となったのは、東アジアの植民文学を研究するために日・台・中・韓の研究者が作っているゆるやかなネットワーク「植民主義と文学」である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 波田野節子	4. 巻 11
2. 論文標題 引揚げ：日本への移動 加害と被害の意識を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際地域研究	6. 最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 波田野節子	4. 巻 18
2. 論文標題 呉世宗著『沖繩と朝鮮のはざま』書評	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 植民地文化研究	6. 最初と最後の頁 179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 波田野節子	4. 巻 20
2. 論文標題 上海版『独立新聞』の連載小説「血涙」は誰が書いたか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近代書誌（韓国）	6. 最初と最後の頁 920-937
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 波田野節子	4. 巻 249-259合併号
2. 論文標題 『無情』から「嘉実」へ 上海体験を越えて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 朝鮮学報	6. 最初と最後の頁 85-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 波田野節子	4. 巻 3
2. 論文標題 李光洙のハンゲル創作と3・1運動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 56-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 波田野節子	4. 巻 15
2. 論文標題 植民地時代後期李光洙の日本語小説について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 近代書誌 (韓国)	6. 最初と最後の頁 180-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 波田野節子	4. 巻 16
2. 論文標題 謝春木の日本語創作	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 植民地文化学研究	6. 最初と最後の頁 50-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 波田野節子	4. 巻 55
2. 論文標題 李光洙が出会った四人の日本人	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 朝鮮史研究論集	6. 最初と最後の頁 5-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 波田野節子	4. 巻 20
2. 論文標題 金哲「植民地の腹話術師」を読む	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 クアドランテ	6. 最初と最後の頁 55-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 波田野節子	4. 巻 13
2. 論文標題 日本雑誌『文章世界』に掲載された洪命憲の日本語短篇「かきおき」(韓国語)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 近代書誌(ソウル)	6. 最初と最後の頁 215-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件(うち招待講演 14件/うち国際学会 14件)

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 東アジアの近代文学と日本語小説(韓国語)
3. 学会等名 延世大学原州キャンパス 海外学者招請フォーラム(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 引揚げ: 日本への移動 加害と被害の意識を中心に(韓国語)
3. 学会等名 中国海洋大学 韓国学国際シンポジウム(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 許俊の帰還小説「残燈」(通訳付き)
3. 学会等名 吉林大学 植民主義と文学シンポジウム(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 許俊の帰還小説「残燈」について
3. 学会等名 朝鮮学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 ハングル創作の道 李光洙と3・1運動(韓国語)
3. 学会等名 第4回世界ハングル作家大会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 植民統治期末期、李光洙の日本語小説について(韓国語)
3. 学会等名 韓国科学技術院大学・国際ワークショップ『帝国と言語』(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 李光洙の日本語小説
3. 学会等名 延辺大学・中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 『無情』の表記と文体（韓国語）
3. 学会等名 'In Search of New Horizons' at Center for the Study of Asia at Boston University（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 『無情』の表記と文体（韓国語）
3. 学会等名 'Centennial Symposium of Choonwon 's Mujeong and Newly Discovered Poems' at George Mason University（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 李光洙の2・8宣言
3. 学会等名 在日本韓国YMCA公開セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 李光洙が会った日本人たち（韓国語）
3. 学会等名 西江大学・大学院BK21 海外碩学招請講演（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 李光洙が会った日本人 山崎俊夫を中心に（韓国語）
3. 学会等名 東国大学・大学院BK21 海外碩学招請講演（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 李光洙が自ら作った詩集『ネノレ』と『ネノレ上』（韓国語）
3. 学会等名 春園研究学会（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 李光洙が出会った日本人たち（日本語）
3. 学会等名 朝鮮史研究会大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 碧初洪命憲の日本語小説「かきおき」(韓国語)
3. 学会等名 洪命憲文学祭(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 『無情』の表記と文体
3. 学会等名 台湾政治大学The Chinese Association of Korean Studies (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 波田野節子
2. 発表標題 『李光洙、日本に会う』著者特講
3. 学会等名 ソウル大学奎章閣 海外韓国学著者特講シリーズ第5回(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 在日本韓国YMCA編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 275(62-74を執筆)
3. 書名 未完の独立宣言	

1. 著者名 波田野節子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ソナム(ソウル)	5. 総ページ数 1272
3. 書名 李光洙後期文章集 (1938~1945) 詩・随筆・座談・記事・書翰	

1. 著者名 波田野節子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ソミョン出版(ソウル)	5. 総ページ数 290
3. 書名 日本語という<異郷> 李光洙の2言語創作(韓国語)	

1. 著者名 日本植民地研究会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 288(178-189を執筆)
3. 書名 日本植民地研究の論点	

1. 著者名 崔珠瀚 波田野節子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ソナム(ソウル)	5. 総ページ数 1064
3. 書名 李光洙後期文章集 (1938~1945) 評論・論説	

1. 著者名 和田博文・徐静波・俞在真・横路啓子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 490頁(238-249を執筆)
3. 書名 <異郷>としての日本 東アジアの留学生が見た近代	

1. 著者名 崔珠瀚・波田野節子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ソナム(ソウル)	5. 総ページ数 1095頁
3. 書名 李光洙後期文章集 (1939-1945) 小説	

1. 著者名 波田野節子	4. 発行年 2016年
2. 出版社 プルンヨクサ(ソウル)	5. 総ページ数 331
3. 書名 李光洙、日本に出会う(韓国語)	

1. 著者名 権寧俊・波田野節子・小谷一明・木佐木哲朗・田中宏・堀江薫・王恩美	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 226(21-40を執筆)
3. 書名 東アジアの多文化共生	

1. 著者名 波田野節子・沈元燮・李侑珍	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ソナム(ソウル)	5. 総ページ数 288(9-20, 35-142を執筆)
3. 書名 李光洙親筆詩帖『ネノレ』『ネノレ上』(韓国語)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>日本学術振興会科学研究費補助研究のページ 日本語創作を通して見た東アジア3国文学の関連様相 http://hatano.world.coocan.jp/#kaken</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	崔 末順 (Choi Malsun)	台湾国立政治大学	
研究協力者	王 恵珍 (Wang Huizhen)	台湾清華大学	
研究協力者	大久保 明男 (Ookubo Akio)	東京都立大学	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	垂水 千恵 (Tarumi Chie)	横浜国立大学	